寛永諸家譜

宇多源氏

七卷之内

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(151)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

墨田　　同文

本村

寛永諸家系圖傳

宇多源氏

墨田

佐々木乃族なり盛隆より小寺氏となり小寺八村と源氏赤松九族なり孝高より黒田乃本氏となり咎之より松平九樣号と書ス

浅草文庫

宇多天皇八代

秀義

佐々木三郎　六條の判官為義猶子となる

定綱

左衛門尉　従五位下

信綱

四郎　従五位下

高信

原波守　左衛門尉

氏信

京極

満信

京極　佐渡守

宗氏

宗満

京極

黒田左衛門尉　冥加

正安三年八月廿五日家ヲ遁法

ニ号ス

延文二年七十九歳ニ死ス

高満

伯耆守　従五位下　左衛門尉

宗信

出羽守　従五位下

満秀

高清

左衛門尉

高教

伯耆守　従五位下

信長

右馬助

高宗

伯耆守　此間中絶

重隆

黒田下野守　生国伯耆　赤坂郡稲田

後ハ赤松ノ一つき播州姫路ハあつ

永正五年ハ誕生

永禄七年二月六日ハ十七歳ニ成

法名宗ト

義隆

義濃守　生國攝津姫路

時に小寺藤兵衛政職数千騎とちこゞへて威を四方に振ふ義隆主君に

仕へ奇軍功ありこれゆへに小寺

の同名となり政職死して子なき故

にて義隆子ちこゞふ

天文十三年八月廿二日六十二歳にて

死す　法名宗圓

孝高

小寺官兵衛　生國同所

孝高弓馬の道に長じ又和歌に

通ずるもまれなり十七歳の時四海に名を

とゞろかす矢とかたなに於ふ

七卒にさきゞりくるゝ所あり

ハヒ

永禄十二年赤松下野前司大軍を
をこして姫路をせめ寄るよ陣
う軍勢をたてうて大ゝ合戰ニ年
案内を討ち取る敵名大よあらそう
天正元年信長の都ゝ入と雲ゝ譲
ゝ申ゝ廣せんとゝくと治し信長ゝ
まみ四時をとゝまい物ゝ時よりうに
信ゝうはれ中国をたいらけ雲を
ゝをとりゝくせんくまこせんとをに約て

ゝ
同三年中ゝ勢播州の英賀ゝ陣
ゝり姫路の神をとうひみゝ考ゝ時刻
をゝりさゝせゝ敵ゝ戰ひ敵ゝ敗軍を
信長感書をもとまよ
同四年信長播州を切ゝりふゝべこ
秀吉ゝ信ゝ考ゝまをゝて
役をたゝて遠ゝくまゝ秀吉
十月ゝ播州ゝ入手に指図ゝ書く

今より後は教汝こと兄弟たらん必たがふこ
とかれとなり東播を日よりごとハ
孝高の切なり西播一下知よりこのハず
佐用と月命とのぶ孝高兵をうて
佐用の城をせむ城中ちからつきて
ぬ者ん こおけりと兄弟ともふ討死其
日ふ城をのりとるそれより三月の城を
ここむく数十日をとふ孝高
兵を少して城をのりおとして秀吉大

よりもとひをかこ名馬を拵ひ山中
麻うみをもく城をとりこしら長濱ふ
ち入たまふ信長宮く感書を給ふ
同五年四月中国及紀伊国漢徒の
職兵八千余人一揆よりなりく播磨れ
別府の城をせむ秀吉宮く孝高より
加勢とふ孝高精兵六百余人とつも
城中の兵こ課し合せ自分きこり
て八千人よりあるかかをけてせ戦ひ

七十余人をころす敵利をうしなふく
逆徒を信長とよび秀吉軍功をみ
して感書を給ふ
同六年九月荒木摂津守謀叛を秀吉
知事の人をとらゝ孝高を城中よ
りたつねしかのごとく信長よりこゝろ
ゝんこと荒木をきつもして孝高城
城中よりこゝろをとゝ孝高が一族又識隆
よりたぎくいつぐせんこいふ識隆がいく

ゝ
あまをすりさき長政を信長へ人ぢちよ
いぐせりいぐくう人質をとゝたゝんや荒木
が孝高をとゝふハ非義なりいぐくう
此義の人りきゝごりんや親族現り
伏してきゝろを定秀吉ふけ代を
孝高城をめけかゝり
同七年秀吉信長の下知をとりて
播磨の勢をひさいく但馬国情をせむ
先手賀古川よりこゝきり三木ゝ

城を別而毛利と内々謀叛を合く謀叛を
國人皆別而内々志ごふ秀吉をうら
ときハまいくいでせんこいふ孝高
秀吉をうらく先書写山内陣ごろ
志む毛利なるべ内々字数多ゞ野合
六百人三月の城をせちうこむ秀吉孝高
城をたたそげんゞ
陣うり小勢なるにはわく加勢を後
内ふ信長使をたちうく軍をひき
うしむきをふうりて高倉山を捨て
書写山よ城
同八年三月の城をせち正月十七日別而
長治城内火をとけ自宮ま秀吉ニ
乃城をそれ居城こせんとて孝高がいく
この地ハ播ノ国ときなり孝高
居城姫路ハ国の中ま私城ハ使
ましてゝ別姫路をとる人皆云
なりこいて

同十年秀吉毛利を征伐して伯耆中村
の城と水ぜめふし城を志ゐ兄弟自害
をこのゝきの明智が京都をとしく信長
と戦して光脚を求してこのゝちとつぐ
孝高秀吉とすゝめ毛利と和談し
六月十二日明智と逢て
同十一年秀吉柴田を征伐して孝高軍
功あり
同十四年秀吉信孝を命じて来る

けゝ〳〵へ入らんとてこいてり此孝高を
して四国中国の兵三万人とひきいく
ゝ前に小舎の津守毛の城を責落し感書と給ふ又香春岳の
城をうこみ高橋陸系を
同十五年秀吉自分筑紫に入軍と
なり薩摩を征して孝高黄軍よりて
て鴻津に戦ひ大ひに後に鴻津
和談し秀吉明治の時孝高より前

四六郡と称ス

同十六年五月勅命中納言ニ任ス

秀吉始より軍のさうと成ると

いへともうの大志といえとも四郡

とあるをして

同十七年ニ領地を嫡子長政ニ

ゆづり隠居し入道して如水と号す

文禄元年秀吉朝鮮を征す長政

先手の大将ゝ

同二年秀吉如水をもて旗を挙ク

いくゝ朝鮮ニ渡り清軍と戦剣を

しこ明朝の使関白秀次といさめく

波海せしむ秀次さうもて後清ハ

滅亡を人ゝの勇壮と感ず

文長五年

関原大檀現奥州の景勝を征し後

出政先陣ゝ如水を出ず

八月ニ石田三成謀叛の告あるを

石田治部少大夫義統とうち立て出羽
へ入九列を志りゐんことを如水申れ候
空く其日不豊後の速見を石へ
引て大友こ合戰し数百人を殺し
義統を生捕よを同日安藤は熊谷
門兵衛が城なり家来八塩見和泉守
う城なり毋人こうに石田が意まして
関ヶ原よりうち城代小人数をおして
合戰を如水数度戰終り情城代

降参をこの時海津兵庫頭大坂
より山浦へ引籠如水又和
泉守退兵私二瘦とうち見へ
まわく九列なるで麾下に属をす
んで出るの小倉乃城をとうる毛利
吉成守降参をまた又筑後へ入柳川の城
久留目の城をうしに降参をまたより
加藤主計頭と参し九列の制法
をなく九月

大権現大坂より還座遊ばされ十一月朔日
大坂へ入り
大権現よりまんえんくまつ高野の列
軍の次第と きつ[illegible]このそき賞
とをこかうんこと[illegible]水青[illegible]のゆと
とりく辞退してうけず
芸長九年三月廿日より辛とゑ十九歳
龍光院と号して

長政

吉兵衛　甲斐守　筑前守
生国播州姫路
幼少の時人質ゆえ伝長より
伝長秀吉よあづけ[illegible]の伝濱よ
あり十四歳より文とともに秀吉
よりこびし江州梁瀬より柴田合
戦のときふ初く首をとる

天正十二年紀伊國の一揆和泉雑賀和国
の城をせむ又これ亦くもく首二
うつる事
同十五年秀吉薩摩より入長宗我部
日向の財部を戦ひ自分敵をきり
て大りきを城破りの列たいらぐ
後豊前六郡を給ふ秀吉国の一揆大ふ
おこり要害より城をかまへ籠り敵服
せず去改一こく色を責殺し首城きり

こと二千あまり色を大坂へ送り敵を秀吉
大りきをひらく名馬を給ふ
同十七年六月十七日より位五位下へ
叙し甲斐守より但馬
同十九年の名を秀吉胡蘇と征さん
ゆへして肥前の名護屋と築く長政
肥前守
文禄元年秀吉名護屋より乗り小西
加賀とりくこと色を長政

と大将義五千人大友侍従六千人毛利
元就三二千人為津兵庫頭一万人高橋
九郎杉月三郎伊賀民部大輔為津
又七郎四組合二千人就合二万六千
人なり長政もとひきくかりくく
一日と陣とり胡蘇より入
金海の城とぬきあれより昌原城を
責落し王城へ入釜蘇国王義列へ
小げうり小西行長ハ平壌より陣とる

王城をとるとの日路なりけるハ
大友侍従次を長政次を久留国秀包
次を小早川隆景道筋へ引なれ
城と申へうり大明の援兵数十万為
平壌とせむ小西せんとなくて敵を
大友へ引ふ大友の大軍より引
ちく城とちく王城へ入小西が
軍勢かうぐうこれ長政が家臣小河ぐ
誘弟の城より高政海列ちを

又く小西よ糸舎し小西がけるもこう
兵庫部へ向し入使を隆景ゟ申へけう
りくいくく人数をけうもよ大
明人と一戦をとぐんといふ隆景ゟく
急よ郡山城よ帰べし小とりして
大ア戦ム事を用なうこと之よ使を
くせくくびこうの先政岡城よ入く
隆景よ糸舎ゟ隆景実城ちく戦
を決せんとす大谷刑部が補王城より

又く隆景ゟ政秀包の三将よ射し
色北ア引取給へこと葉をけく
ていまよう大谷同道しく王城ア
入り数日の内大明の兵岡城の河城
ゟくして王城をとせむ隆景長政之花
をとりく先陣ゟし合戦して大よ
勝河ア打出て死傷色の数千人
王城の兵業靖の後勢鮮和とあう日な
の兵も釜山浦ゟ向う

同二年秀吉の下知ありて諸国諸
将とたかく晋列の城とせむ七日の
内に城を責破り長政先登す一
なり和談調ふ諸軍攻解
慶長元年又釜山に入り攻櫻山
より戦て万余人を切伏せり梁山をも
て城こもる
同二年の冬大明の兵百万蔚山の
城をとりこむ長政諸将と後詰をも
て

数千人を殺し大明の兵退散
同三年の夏又小西が所天の城をこ
む長政兵を引て早船をもつて先
をもて小西がかくしてかへ
秀吉薨じ長政攻解
同四年六月六日
大権現保科弾正忠をもつて
長政君へ長政の嫁を
同七月

大檜現奥列の景勝を征し給ふ長政
先陣少々鄭列宇都宮よりく
時ゝ石田三成謀叛のよし告来り
大檜現二方の侍従引いきんたり
長政より勝をとゝ大祝まてのぼり
大檜現小山ゝをひく評定しこ方
進發ゝさぐまり則長政とゝび
同し先陣とゝしてこせろときゝ
他の勢垂ゝる馬をたまふ八月尾列

よりさ大河をとゝこし岐阜をせゝん
と評定を池田三左衛門福島左衛門変
廿二日より川をとゝこし岐阜をせむ
いて多数田中ゝの川を渡しきれし
岐阜へ可向よをゝはず合渡ゝ
石田が先手岐阜後詰のさゝ陣をゝ
ゝゝ垂柳ゝ三里斗をいきを
て合渡を渡しを敵を追拂ひ数百
討ゝ石田も渡まくもゝ

弓勢と大柳へ引懸り候大
将おたかしく者聲の原に陣を
大檜現の命をうけ筑前中納云と
ちくれ方ふらいなを見をうち
又毛利が勢老川後原ごとうへひ
うこに使をたかしを毛利輝元おて
味方引いなをぶくをしうち
五郎の約束調ふ告たくまる
九月十四日

大檜現表坂にはきを治ふ泳ぎをうち
ちとかくこの日合戦あるへきの由觸
あり十五日石田宮部多鴻津大柳を
うち出て関ヶ原に陣を毛利輝元を
南宮山に陣ゐ筑前中納ハ松尾山に合戦をくに始る数
自為石田が陣よりきかると大に戦く
ちもと毛ぶこれとき中納をうきれ
ちと合せうち切とり南宮山の人

数ハ勢とおろさをあらけもこと石田
方義多勢軍して四方へふけらる天下
しくしく降服して

大権現大坂の城へ入給ふこのとき諸
大名よ恩賞をとり多長政を筑前国を
賜しく筑前一国をとるり福岡を居
城ニす

同八年江戸位下よ叡しく筑前守よ任ぜ
同十一年ハ江戸石垣を築

同十五年よ尾張名古屋の城普請を
はじむ

同十九年大坂陣の時ハ政ハ江戸の
留守居を仰付られ嫡子忠之をしく
筑前守よりのぞつて陣中まるくまみえ
たくまつり一方の責にと請承しむ大坂
和談して諸大名帰国ス

同二十年乃夏大坂又おこる

大権現

白徳院殿と治ちまふこのときに出仕して御陣のあとにそなふる月
七日大坂没落ス

元和三年

大樹現歿じ給ひ下野国日光山ニ
葬ル

東照大権現ニあがめたてまつる長政
国中の大石を撰ひ出さ数文ちろ
数国より居をはらり大社まで南海
をあつ日光へてげ御廟のまへ
ちゑ城ス

同九年

白徳院殿れと治の時出仕なまな
かり療養のさめ就恩ちりあり

白徳院殿

将軍家ようれたひとあり変ス
れ慈切あり八月四日辛未歳六十六
法名道ト真雲院と号を鏡ち形河

郡宗被与葬ル

患之

松平右衛門佐　生國筑前守形の郡被居
母ハ保科源四郎の女
享年十七年十二月初ノ後ノ如し
大檀現ル　ましまえくまつり同十八日
よ元服し右衛門佐と号し長光の代
腰物正宗の御脇指馬御鞍とくさう

同十八年正月廿一日江戸より向し
台徳院殿ゟ渇しくまつり御諱
の字をゆゑび松平氏と名乗ひさき
御腰物なくひし国次の代脇指とくさう
同二月朔日従五位下よ叙ス
同十九年大坂陣よ患之國中人数
と率し一番とさちくこむ
翌年の大坂陣乾又おけこむ
寛永三年八月従四位下よ叙し

伺候より但ず

同九月十七日國中の大名をもりて為

居とさせ今より沼尻迄一面に新山城

神ずるべし

同十四年沼尻天守の石垣を築

長興

黒田勘兵衛　甲斐守　母たかし

元和九年筑前國和泉下度郡麻の

之郡五万石とゝ為り秋月を居城ゝて

寛永三年八月十九日従五位下より叙し

甲斐守に但ず

高政

黒田官兵衛

元和九年筑前國鞍手二牧二郡四万石

とゝ為り東連寺を居城ゝて

寛永三年八月十四日従五位下より叙し

東市正より任ぜ

同十六年十一月十三日より死去

女子

甚四郎　早世

女子

井上濱路ヶ妻

女子

死去

女子

松平右左衛門ヶ妻

女子

万吉

実忠之子なり高政死去仕候
寛永十七年三月十五日
上意をもつて高政の遺跡を下さる

某

右兵衛
寛永十二年正月五日初て
将軍家へ謁し奉る
家乃紋 茨の九間三桜 七ハ白俵を用
饌の紋 幕乃紋 中白

国立公文書館
National Archives of Japan

宇多天皇五代

成頼

従五位下　兵庫頭　依て木の祖

章綱

兵部丞

[illegible]

源左史　従五位下　紀州侍従

行定

百石五郎左史

定通

義位

定時

武蔵源二

時信

松木六郎

信光

同左郎　法名光念

信京

孫右衛門尉

信行

信宣

法名道喜

信冬

男文彦右衛尉

法名宗能

式部中絶

栄

豊前守

小隙長氏とゝ氏綱ゝ法名宗三

栄

豊前守

小隈氏綱とすび氏康子にて
法名光林

信次

左衛門尉
氏綱とすび氏康子にて相州之浦
之水子にて討死 法名法西

兼

兵庫頭

信忠

左衛門尉
氏康とすび氏政子にて
法名日法

信盛

左兵衛尉 母は武田下総守孫同太郎
が女初氏政とすび氏直子にて

天正十八年
東照大権現よりきくまつをもらせ給ふ
右衛門督ふまつる
元和三年より病死　法名日源

信之
右衛門督　母は明倉播磨守女
寛永三年
大権現よりきくまつをもらせ給ふ

同十二年
右衛門督ふまつる
寛永三年
将軍家ゟきくまつをもらせ給ふ

康俊
豊前守
小除氏康をよび氏政氏直よりいふ
天正十八年三月廿九日亡　山井

乃城ヲ攻ク討死七十三歳

法名京覚

康信

新右衛門

氏康氏政ヲ攻ル氏政ヨセタル

天正十年甲州列新府ヲ攻ク

大権現氏政ト御対陣の時八月十日

御坂表ヲ攻ク合戦ニ討死

四十二歳

法名京安

直元

新右衛門

氏政ヲ攻タル

大権現関東御入国のときそむく

されたるゆゑ

台徳院殿ヲ攻キ出ル

芸長十九年大坂ノ陣ニ伊

掃部頭絶了家ノ陣ニ参十
二月廿五日陣中ニ於テ病死
四十四歳　法名宗英

忠次
彦次郎
大権現
台徳院殿ヲトブ
将軍家ニ仕ヘ奉リ

正次
三郎九郎
将軍家ニ仕ヘ奉リ

某
若十郎
氏照ニ仕ヘ相列ニ陣ニ於テ
討死二十三歳

元重
傳右衛門

氏盛子法名
天正十八年十二月
大檜現子法名ゑくまつ
文長四年伏見の城蔵法名
同五年大坂子ゑらまつ
とあづかる
同年奥州陣子伊達
元次

知十郎　法名正白
元年
知十郎　生母氏義
元成
長市
十五歳ゑくまつ
石清院殿子法名ゑくまつ

病死四十二歳　法名京哉

元晴

猪之助

寛永十三年ヨリ

将軍家ヲ法ヘ奉ル

信次

長九郎

十六歳ヨリ

将軍家ヲ法ヘ奉ル

寛永十三年ヨリ病死三十三歳

法名道忠

方次

長九郎

寛永十四年三歳ヨリ信次

跡職ヲ相続

信高

遣酒盃

氏政より
永禄十二年七月七日後列久能より
をひく戦功あり感状なるべし
七刀一腰とらせ申べく
同月廣列より龍ひまつ敵味方
一艘ゝ色成討取ゝ忠功より感状
なるべし七刀一腰とらせ申べく

同月金沢合戦の時敵二人と討取
ゆへ感状を与申べく
同月後列をひく敵二人いけ
どりにされゆへ感状とらせ申べく
同月海上乃合戦比類なきにより
感状をゝびふ七刀一腰と添へ後
氏田勝頼より伊豆國中小滝へ
出張数軍忠張を伝高光と討取
加て感状をとらせ申べく

梶原景季といふもの伊豆国に
向ふこうりの住人桃戦く勝利
とえの村数ケ所うちやぶりたに
敵私と景季にしより感状と角ふ
を後勝軍ふみ立貴文と角ふ選
いまにこれありのち
大檜現ゆ住人ふてまいり響列
生津村松浦りとしく逆賊横切
て小演民部右衛門尉と住国押よせ
敵数多討死をもやく是と注をもて
りあ人ふれ感状と給ふを後甲府
乃御数寄いこもべきれ御書と小演
民部右衛とすい住国りを給ふ
天正十二年小牧御陣のとき解雲江
の御りとひく丸鬼大隅守兵私り
景季信国ふれこ戦く討死三十
二歳

高則

虎助　生國越河

大権現ヲ法ノ如くてまつり給ふ三十二歳

ふく病死

真澄

虎助　生國武蔵

七歳ふく

大権現とすび

台密院殿ヲまみえ奉りまつりを

のち勤仕を

綱信

若狭守

小除氏照ヲ法ノ如く家老となるれち小除

氏政綱信とのく信長ヲ法ノ如く

之列器淳とをぐる時

大檜規子婿となりまして後
大檜規兵衛東御入国のとき西尾張守
命し縄信と名おのとき召連れ
まいりまして
享長十四年七十四歳にて死
法名休庵

氏信
民部少輔

頼次
十左衛門尉
ちゝハ小隙氏照子にて
大檜規兵衛東御入国のとき父縄信と同
ゆいぐされ
大檜規子にてまいりまして

信縄
七郎兵衛

台徳院殿とすび
将軍家にたてまつる

重繁

市兵衛
将軍家にたてまつる

重信

忠右衛門尉　生母武蔵

十四歳より
大権現にたてまつる後
台徳院殿にたてまつる
元和九年より
将軍家にたてまつる
寛永十二年より御納戸頭となる

重三

長兵衛

将軍家よりたまはる書付

棄

兵部少輔
小隙家すけ

法名宗見

元次

義右衛門
大膳亮すけつぐ

法名浄誉

元重

理右衛門　法名安清

元勝

義六
寛永四年正月より
将軍家すけたまはる

葉

鹽田

衆乃紋

只同様

信次

黄墨苔信濃　生國之絵

義昭下洛ス昭氏ハ武田なりのち

之絵ハ黄墨苔に任せ故ゆ武田を

改メ黄墨苔ニ号ス

間宮

直信

美濃守兵衛尉　生國同所

義昭に仕ふ

永禄三年八月より病死八十歳

信正

弓矢助左衛門　生國下総

母方北條氏弓矢を以て仕へしものの隙

氏政に仕へ其後軍列信玄に

つゝく其子弓矢生涯無

大檜規に仕へ信正が威

ゝ家よりゝく美濃守と汲く弓矢

こなり十三歳まゝ

台徳院殿に仕へまつりて

将軍家に仕ふまつる

寛永十八年十三月六十七歳にて死

正次

弦右衛門　生国武蔵

寛永十二年より

将軍家より仕へ奉る

信重

次郎兵衛　生国同前

寛永十六年より

将軍家より仕へ奉る

武田家の紋

另家の紋

割菱

四目結

国立公文書館
National Archives of Japan

間宮

正重

民部　生國相模

小除氏也其後ハいづくにか

大檜現ハ法ハ人ハ大御巖と

ハ　ハ　ハ六十五歳まで

法名宗林

正秀

左立郎　生國同所

実は依田大膳ゞなり正重嗣子か

きゆへよ[illegible]ゝて

元和元年大坂御陣より伺奉して

討死　三十一歳　法名常秀

正勝

左立郎　生國武蔵

台徳院殿とよび

将軍家よりたゝくまつり大御表

とたゝむ

勝宗

八ゝ郎　生國同所

将軍家よりたゝくまつり大御表

たゝむ

新乃紋

四月號

国立公文書館
National Archives of Japan

木村

清定

孫八郎　生国参河

清康君ヲ始ル人也

清政

戸兵衛

大権現とよび
台徳院殿
将軍家よりたまはる

清長
孫八郎
十六歳なる
台徳院殿ふたりの父清政
とたかしく
信濃守なり

将軍家より給ふ
家乃紋
日向錦

国立公文書館
National Archives of Japan

木村

●某

信濃国武義

小泉郡[illegible]

法名浄心

良盛

[illegible]八郎

文長十九年
大檜現ニ法ヲ[illegible]ましますのち
病死

良繩
彦八郎
右法院殿とよび
將軍家ニ法ヲ[illegible]まします

威信
五郎右衛門
右法院殿とよび
將軍家ニ法ヲ[illegible]まします足利綱戸
役をたつむ

家乃紋写用錯

国立公文書館
National Archives of Japan

木村

●長忠

源右衛門　生國近江

長正

左右衛門　生國伊勢

文長元年より

台徳院殿より法ゝ出きゝまつる

寛永三年歳六十四よりて死ス

法名更長

長吉

庄右衛門　生國武蔵

享年十七年より

大権現ゝ

台徳院殿

将軍家より法ゝ出きゝまつる

家乃紋四目結

国立公文書館
National Archives of Japan

本村

勝重

勘右衛門　生國山城

秀吉手代ふ　法名宗喜

勝正

勘右衛門　生國同苗

大久保相模守と先宮ゝして
大檀現よりたくさんまつ歌ゟ時ゟ勝正
女郎の地蔵たてゝ　法名宗光

勝清

地右衛門　生国同所
寛長十九年大坂御陣の砌勝清
として淀殿を乃人を禁ぜむ
ゝき　柳原源兵衛尉辛二十人と率
ゝく大坂乃城へいんとて勝清路と
鹿ゝ道ゝ板倉伊賀守　三関ゟ
達ゝ乃ゝ二條の城ゝとゝく
ゝおゝれ
大檀現ゝ渇しゝてまゝり麓茶乃
ゝゝりゝあり
慶安年御陣のゝゝ後生和尚淀の
四城ゝ居ゝ御膳と献ぜんこと
大檀現午時勝清ゞ宅ゝ休ゝ申ゟ

其のうち二隙の城下をしくれ加増
十四万又淀川堤普請を書船役を
仕とむ

勝吉
孫次郎　生国同前
右淀殿ゆゑ
将軍家へ渇してまゐ候

家乃紋階子

国立公文書館
National Archives of Japan

吉真ノ上ハ[illegible]

末村

吉沢

孫三郎　後九郎左衛門ニ号ス　生国三河

大樹現ハ[illegible]

吉真

三右衛門　生国同前

大檀那平氏入道まうしまし

吉正

三右衛門　生国同前

寛長二年

白浦院殿平氏たるまいる

元和四年ゟ死を蔵三十九

法名　宗清

久正

三右衛門尉　生国武蔵

白浦院殿平氏たるまいる

吉房

三右衛門尉　生国同前

将軍家平氏たるまし

吉宣

泳之兵衛　生國武蔵

実ハ竹尾傳九郎ゟなり　幼名

吉正表くみゝて吉保

将軍家ゟ法名賜ハる

寛永九年九月小十人組ゟなる

元正

源吉郎　生國同所

台徳院殿ゟ法名賜ハる

伊勢ゟ伊東

大坂ゟ伊勢ゟ同付ゟなりく伊東ゟ

元和三年巳十八ゟ病死

法名　宗光

勝元

甚九郎　生國武蔵

台徳院殿ゟ召

将軍家より法名を賜ハる
寛永六年四十四歳ゟ病死
法名宗也

元宣

基右衛門　生母同前
寛永七年
右滝院殿をもとび
将軍家より法名を賜ハる

保元

猪右衛門　生母同前
享年十八年
将軍家より法名を賜ハる

家乃紋四目結
指物紋笠地白一文字

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan